

3 「2」と出会う

池田 江美子

シートの上にクッションほどの大きさの果物や野菜やおにぎりが置かれています。周りを囲んだ子どもたちが「ぶどう！」の声を聞いて手を伸ばします。ぶどうが取れた子、取れなかった子、どちらもニコニコ顔。みんなで、一つの課題に向き合っている、そのこと自体がワクワクして楽しいことなのです。

私が初めて担任した子どもたちは、重い障害があるため教育の対象ではないとされ、就学猶子を余儀なくされていました。その一人、恵さんの口癖は「サイタカネ」。初めは、「そうね、タンポポがもうすぐ咲くかな？」と返していましたが、どうも噛み合いません。お母さんに尋ねると、ラジオの相場ニュースで話されるサイタカネ、つまり「最高値、のことだったのです。そうした子どもたちが毎日通ってこられる学びの場をと父母たちの働きかけで作られた学級でした。

(1) 物の名前と「かず」のちがいを発見する

母たちが、古着や古い靴下、風呂敷などを利用して作ったバナナやイチゴのフカフカ教具は子どもたちのお気に入り。何より実物よりおっきい！のが良い。「これな～んだ」「いちご！」「食べてみよう」「モグモグモグ」「おいしいね！」「あまいよ！」「だ～いすき！」とごっこ遊びしながら一つひとつ確認していました。種類も数も増えてくると、たくさんの中から「ぶどう」を選ぶ遊びが楽しくなってきました。

「おにぎり！」「だいこん！」と問題を出す楽しさも子どもたちに手渡し、遊びに慣れてきたころ「いっぱい！」の声があがりました。ソレッと前かがみになって取りに行き、勢いあまって、悟くんは両脇におにぎりを抱え込んでいました。それを見て、「いっぱい」が大はやりに。「いっぱい

か、いっぱいではないか」子どもたちの目が物の名前ではなく量に向いた、発見の時でした。「かずの世界」への扉が開きました。



教具は大きくて、両手に一つずつ抱えるのがやっとです。その状態を「2」と呼ぶことにしました。合言葉は、みんなで「両方の手がいっぱいになった～ら、2！」。一人ずつ、好きな物を選んで持ってきます。右手にバナナ、左手にイチゴの時もあります。「あれ？」なんか変だなと思う子、「いっぱいいい」と思う子。つたない言葉を私がつたないで、「両方、同じバナナがいい」ことを感覚でつかみます。集合数としての「2」は同じものの集まりでなければなりません。初めて「いっぱい」に気付いた時の光景をみんなで思い出し修正していきます。右手にも左手にも同じものがある時が「2」であることが十分に体得されると、「お耳も2」「ほっぺや目も2」「足も2」と両手で触れて確かめる学習へと発展していきました。一人ひとり前に出て発表する楽しさも味わえるようになりました。

「みんなと一緒に過ごす楽しさ」から「仲間と学び合う楽しさ」へと楽しさの質が変わっていきました。ゆっくりとしたペースではあっても、もてる力をフル回転させながら、目を輝かせて「2」の世界を手にしていく子どもたち。「子どもって、こんな風に認識を深めていくのか」の驚きとともに、子どもたちとの学びは新鮮で、この「2」の取り組みは深く心に刻まれました。その後に出会った「かずの世界」に入ろうとする子どもたちにも、「2」から取り組みを開始するスタイルはこうしてできあがりました。

(2) 触れて、活動して「2」を確かめる

筋ジストロフィー症のため握力の弱い敦ちゃんと脳性まひのため微細な動きが難しい拓くんが入学してきました。「仲間集め」や「仲間分け」の